

全学共通教育についてのみ(教育部会用)

教育部会名:外国語第 I(英語)教育部会

部会長名:遠田勝

作成者名:遠田勝

概要(2000 字)

1. 実施体制について

平成21年4月に外国語第 I(英語)教育部会に所属する教員は、人文学研究科 3 名、国際文化研究科 18 名、国際コミュニケーションセンター11名、海事科学研究科1名の計 33 名であった。うち特任教授・准教授 5 名である。来年度以降は、人文学研究科の専任が担当からはずれるため、特任をのぞくと、専任教員は、国際文化研究科と国際コミュニケーションセンターの 2 部局のみの構成になる。また 22 年度 4 月の部会所属教員は 29 名の予定で、これを 19 年 4 月の 36 名と比べると、諸事情を勘案しない機械的な比較であるが 7 名減となっており、実施体制が向上したとは言い難い。非常勤依存率の増加、専任の特定部局への集中、部会構成員の漸減、これらについては、全学レベルでの根本的対策が急がれる。

部会には部会長1名と3名の幹事がおかれ、3名の幹事のもとに教務委員会・総務委員会・予算/メディア委員会がおかれ、それぞれの委員会に 2 名の委員が選任されている。年間を通じて、適宜、部会全体会議や幹事会、各委員会を開催している。部会長および幹事は、選挙規約にもとづき、毎年選挙により選出し、委員は部会名簿によるローテーション制で選出している。

2. 開講科目・実施状況について:カリキュラムや単位認定制度について

2-1. カリキュラム:

ベーシックコースに関しては、平成18年度に大幅な改正を行ない、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別して、4 年目を迎えた。各々の教授内容・教材レベル・到達目標についてコンセンサスは進んでいるが、今後さらに各項目を精練、充実する必要がある。来年度の時間割編成については、ベーシックにおいても、従来から学生の希望が多かった、ネイティブ教員の授業を増やすために、非常勤においても積極的に採用をすすめたが、より良い雇用を得ての辞退が相次ぎ、結果的には六コマ程度の増加にとどまった。

2-2. ネイティブ教員が担当する少人数の特別編成クラス制(オーラル II として1年次後期に開講)は本年度9クラスを開講し、熱意ある学生の期待に応えている。

2-3. 平成 19 年度から、国際コミュニケーションセンターの英語教員が担当する「英語アドバンスト科目」を設置した。これは、英語文化・コミュニケーション英語・応用英語の3領域にわたって、高度な英語運用能力を育成する上級年次生用の授業である。本年度は、Extensive Reading, Academic Discussion などの他、現代GP採択「選抜制 PEP 特修コース」の指導システムに準拠した Pronunciation Clinic, English Presentation など年間 11 コマを開講した。

2-4. 特別単位認定制度:

昨年度までは、1年次に TOEIC700 点を取得した学生に、「リーディング III」および「オーラル III」の2単位を「優」で認定してきたが、本年度より、基準を改め、「リーディングセクション」において、350点以上の学生に対し「リーディング III」を、「リスニングセクション」において、350点以上の学生に対し「オーラル III」を「優」で認定することとした。前年度の 99 名の認定に対して、本年度は、「リーディング III」が 123 名、「オーラル III」が 143 名(双方認定が 82 名)で、認定単位数でみれば、198 単位から 266 単位へと、34 パーセントもの増加をみた。変更のねらいは、よりきまかく学生の努力をみてやることで、認定者を増やし、あわせて英語検定試験への関心と意欲を高めることであったので、このねらいは成功したといえる。

また、1年次において米ワシントン大学または豪メルボルン大学での3週間の海外語学研修を

修めた学生にも、研修の成績に応じてオーラル III(1単位)を認めている。

3. 活動の状況(授業実施にあたっての工夫や問題点)

3-1. 本年度まで実施されてきた外国語オリエンテーションは、来年度より外国語授業の第一週目に第 I・第 II 外国語それぞれの教室で担当教員が行うこととなり、そのために本年度 3 月末日に、担当教員のためのガイダンスが実施される予定である。この後半に分科会として英語教員のためのガイダンスを行い、これまで実施が望まれながら実現しなかった非常勤講師を含む形で部会の FD を実施し、授業技術と意識の向上をはかる。またこのガイダンスのために新たに編集される『外国語ハンドブック』には、これまでばらばらに告知、配布されてきた、特別単位認定制度や特別編成クラスなどの説明、申込書が一括して掲載されるので、学生の利便性も大幅に改善される。

3-2. シラバスの改善

前年度まで共通シラバスのみで、個人記入は任意とされてきた非常勤への対応を改め、今年度記入分より担当者全員にシラバス記入を義務づけた。とくに評価方法については、単位の実質化に配慮し、複数の評価要素を組み合わせ、それぞれの割合をできるかぎり明確に数値で記入するように指導した。記入されたシラバスについては、部会長・幹事ですべて点検し、一部教員には、部会の基準に従い、書き直すよう指導した。この部会による点検と指導は来年度も継続する予定である。

3-3. ピア・レビュー

21 年度の共通教育のピア・レビューは 5 つの部会に関して行われ、外国語第 1 部会もそのひとつであった。具体的には、11 月 18 日の 3 限に、国際コミュニケーションセンター所属の教員が担当する英語リーディング II の授業がそれにあてられ、評価・FD 委員長、外国語第 2 部会長ら本学教員が参観した。その後、公開された 5 つの授業全てに対する全参観者の評価、感想、意見等をまとめた資料を共通教育課総務係が作成し、それをもとに 12 月 16 日、17 日のピア・レビュー検討会の場で改めて意見交換が行われた。

3-4. クラスサイズ

医学部医学科が定員増により 1 クラス 50 名を超え、オーラル担当の教員からインタラクティブな発話の授業が著しく困難等の苦情があり、また LL/CALL 教室の収容も困難となった。来年度のクラス編成について医学科について 1 クラス(通年で 4 コマ)増が認められ、定員ベースで 30 人台にまで改善される予定である。しかし、全体的にみて依然として英語は外国語第 II に比べて、クラスサイズが大きく、学生にとっては劣悪な教育環境のひとつとなっている。

3-5. 教室環境

これまでマルチメディア対応の LL, CALL 室が不足しており、特に LL 教室の機器類の老朽化がはなはだしい状況であった。しかし、CALL 室は、平成 21 年度からは 6 室に増え、平成 21 年度後期には K 棟および D 棟が改修工事に入り、LL・5 教室は廃棄される。同時に CALL 室が増え、CALL 室は全 11 室となる予定である。これにより、平成 22 年度からは、英語オーラル 1 およびオーラル 2 の授業を全て CALL 室に割り当てる措置をとり、オーラル 1 およびオーラル 2 を履修する全学生にマルチメディアに対応した外国語学習環境を提供することが可能となる。しかし、CALL 室を授業で利用する教員や学生をサポートする補佐等の人的スタッフが教室数に比べ大変不足している状況であり、サポートスタッフに対する改善が強く望まれる。また学舎改修工事によりリーディングで使用される小教室も大型プロジェクター、AV 機器、LAN などが標準で設備され、かなり高度なマルチメディアの使用が可能となった。

様式 2(続き)

項目・観点ごとの記述

基準 5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況)カリキュラム全体に関しては、平成18年度に大幅な改正を行ない、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別して、4年目を迎えた。各々の教授内容・教材レベル・到達目標についてコンセンサスは進んでいるが、今後さらに各項目を精練、充実する必要がある。同時に、1年次において特別編成クラス(後期)やアドバンスト・クラス(2年次以上の前期および後期)などの、より高度な語学教育を提供する科目も開講されている。また、今年度、習熟度別クラスに関するWGを立ち上げ、実施の適否について検討を重ね、アドバンスト・クラスの拡大、レメディアルクラスの創設を含む試行案を作成した。

根拠資料

- ・シラバス
- ・学則
- ・国際コミュニケーションセンターのパンフレット
- ・部会議事録(試行案)

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況)シラバスおよび Web 入力された教科書により、教員の研究が授業内容に反映されているかどうかを知ることができる。

根拠資料

- ・シラバス
- ・教科書リスト

5-1-⑤: 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)多くの教員が、予習を義務づけ、出席を確認し、授業中のレスポンス、小テスト、レポートなどを評価に組み込んでいる。また、オンライン教材を自宅学習の課題として活用している場合もある。また、今年度記入分のシラバスから、教員にはそれら进行评估の項目として、評価の割合を数値で明示するように指導している。

根拠資料

- ・シラバス
- ・出席簿
- ・小テスト答案
- ・提出レポート
- ・CALL 教室のログ、オンライン教材の利用記録。

5-2-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況)平成21年度に、英語部会はピア・レビューを担当し、実施した。また年度末に実施する外国語オリエンテーション実施ガイダンスにおいて、さらに、FDの向上に努める。

特別編成クラスにおいては、ネイティブ教員による少人数(10-20名程度)クラスが実現しているが、ベーシック全体としてはクラス規模が大きすぎるのが、対話・討論型授業などの適切な授業形態、授業方法を導入する大きな障害となっている。そうしたなかでも、CALL 教室や TA などのリソースが割り当てられたクラスでは、よりインタラクティブな、あるいは、多様なメディアを高度に利用し、情報機器を活用した授業が行われている。来年度は、CALL 教室の増設、一般教室の情報機器の標準装備化により、著しい向上が図られる予定である。

根拠資料

- ・シラバス
- ・LL/CALL 教室の利用記録
- ・オンライン教材の利用者記録
- ・ピア・レビュー記録

5-2-③: 自主学習への配慮, 基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。
(観点に係る状況) 旧カリキュラムに対応した再履修専用クラスを水曜5限に1コマ開設し、来年度も継続の予定である。また、個々の学生のニーズに応じ、ハブ室、CALL 室、オンライン教材の利用をすすめている。

根拠資料

- ・ハブ室利用者名簿・ハブ室教員・留学生勤務表
- ・国際コミュニケーションセンター・パンフレット
- ・オンライン教材の利用記録

5-3-②: 成績評価基準に従って, 成績評価, 単位認定が適切に実施されているか。
(観点に係る状況) 本年度記入分より、非常勤も含め、部会教員全員に成績評価の基準をシラバスに明示するように要請し、その結果を部会長、幹事で点検し、不明確、不適切な場合は、修正を要求した。また、評価基準については、単位実質化をはかるために、出席、授業の予、復習を評価の項目にいれ、それらを数値により明示するように要請した。

根拠資料

- ・出席簿
- ・期末試験答案
- ・小テスト答案
- ・シラバス
- ・各教員の自己点検・報告書

基準6 教育の成果

6-1-③: 授業評価等, 学生からの意見聴取の結果から判断して, 教育の成果や効果が上がっているか。
(観点に係る状況) 各教員とも、学生からの評価・意見を、各自授業方法の改善のための参考にしている。

根拠資料

- ・学生による授業評価
- ・学生による授業評価の集計表
- ・シラバス
- ・各教員の自己点検・報告書

基準7 学生支援等

7-1-②: 学習相談, 助言(例えば, オフィスアワーの設定, 電子メールの活用, 担任制等が考えられる。)が適切に行われているか。
(観点に係る状況) 専任教員については、シラバスにオフィスアワーを明記するように要請し、ほとんどの教員は、メールによる相談にも対応している。また、非常勤講師については、今年度記入分からシラバスに、なんらかの形で、授業時間外にも、個別の相談、助言に応じられる方法を記入してほしいと要請している。(勤務日の非常勤講師控え室での対応またはメールによる対応など) また、国際コミュニケーションセンター所属教員は、週に一度1時間、語学学習の相談に応じられる態勢をとっている。センターの HP 上には、各言語別に質問コーナーを設け、メールでの質問に応じている。ハブ室においても同様の個別相談が可能である。

根拠資料

- シラバス
- 国際コミュニケーションセンターHP
- 国際コミュニケーションセンター・パンフレット
- ハブ室利用者名簿・教員・留学生勤務表等